（目　次）

B　理性的な自己意識の己れ自身を介する現実化（255~282ページ、47パラグラフ）

	原書ページ	パラグラフ
（序）	255~256,	1~2.
〔一　目標としての人倫の国〕	256~258,	3~6.
〔二　道徳性の生成〕	258~261,	7~11.
〔三　行為的理性の諸段階〕	261,	12~13.
a　快楽と必然性	262~263,	14~15.
〔一　快　楽〕	263,	16.
〔二　必然性〕	263~265,	17.
〔三　没　落〕	265~266,	18~20.
b　心胸の法則と自負の錯乱	266,	21~22.
〔一　心胸の法則と現実の法則〕	267~268,	23~25.
〔二　心胸の法則の現実化〕	268~270,	26~28.
〔三　自負の錯乱〕	270~274,	29~34.
c　徳と世路	―	―
〔一　行為的理性における徳の段階〕	274~275,	35~36.
〔二　徳の騎士と世路との戦い〕	276~279,	37~42.
〔三　徳の敗北〕	279~282,	43~47.

1／理性的な自己意識（行為的理性）の概要

自己意識の様相 ―― 自己 / 物 ―― としての両極の実在を認識

対象の様相 ―― ひとつの自己意識 / 物としての形式 ―― 自立的

肯定的関係＝承認

精神としての自己意識の生成

「自己意識は精神である、即ち二重の自己意識となりながら、またこれら両者がそれぞれ自立的でありながら、自己自身との統一を保っているところの精神である。」

2／現実化のプロセス～全体の過程との対応関係

理性の過程：範疇という場面：意識の運動：感覚的確信－知覚－悟性
（観察する理性）　記述－標識－法則
｜
現実化の場面：自己意識の運動：自立性－自由
個体の自覚－個体の意識の普遍性への高まり：精神的実在の現実化

〔一　目標としての人倫の国〕

3／人倫の国
「我々」にとっては既に発生している概念である目標＝人倫の国の展望
個体の自立的な現実性－自分たちの本質の精神的統一～習俗としての実在

4／理性の現実化の概念の実在性～ギリシャのポリスの民の生活

5／人倫の国における個体と全体（個別態と普遍態の統一）
①形式：個体の最も個別的な行為を存立させている個別的欲求にしても、その現実性を保持するためには、「民全体の威力」という普遍性が要請されている。
②内容：熟練技術、習俗、他人の労働
③形式、内容相互における統一の構成
「私は彼等他人を私として、私を彼等として直感するのである。」

6／理性の真実態＝現在せる生ける精神

〔二　道徳性の生成〕

7／自己意識の使命

8／限定された人倫的実体～存在の形式における精神

9／自己意識の個別態という契機：「消失する量」：堅固な実体への信頼
～律法や習俗への反抗－対する「この」私としての個体：個体の生ける真実態

10／自己意識における精神の個別的な様相～未達成の人倫的実体

11／人倫的実体と道徳性
「我々」にとっての理性的な自己意識の真理は人倫的実体だが、そう仮定するならば、この場面においてはその自己意識の人倫的世界経験の出発点を見出さなければならない。それには二つの側面がある、と考えられている。
①人倫的実体へ向けての経験の進展としての側面（未達成の人倫的実体）
～孤立した個別的な諸契機の撤廃／ギリシャ
②人倫的実体の幸福の喪失としての脱離の運動としての側面
｜～人倫的実体の述語（付加語）化－個体の自発的配慮の要請
人倫的実体についての意識の形成＝道徳性の生成／我々の時代

〔三　行為的理性の諸段階〕

12／道徳性生成の段階～自己意識の個別者としての自己の享受

13／行為的理性の領域全体の概念

自己意識は他者の否定態であることから、他の自己意識との対立を通じて、意識は自分の前に見出された現実と目的の分裂を感受し、目的に従った現実の改変を企てる。その目的とは、個別的であると同時に普遍的な法則を直接的に備えた自己の実現である。（心胸の法則の成就）その成就によって達成されるのは徳としての自己意識であり、行為自体が善なるものとなる経験である。ここに至ると、自己意識の個体性は現実になんの抵抗を見出すこともなく、自身を言い表すことだけが、その対象となり、目的となる。

a　快楽と必然性

14／自己意識の最初の目的

～自己存在の完遂、「自分を他の自立的なものとして直感すること」

他者の自己同一化であり、その時自己意識は、その他者が既に即自的には自分自身であるという確信を持っている。又、人倫的な実体である習俗や、生活の律法は、この時幻として自己意識の前面からは消え去る。それらは当の自己意識とは別の自立存在や現実を所持する知であり、ただ個別的な意識の現実である存在だけが現前するのである。

15／自己意識の純粋な個体態の実現～無造作な幸福の享受

〔一　快　楽〕

16／自己意識の目的への到達

自己意識の行為にはひとつの契機しかなく、他的存在の形式のみの否定に向かうだけである。何故なら、自己意識にとっては対象的にあるものも即自的な自己同一が保たれているからである。自己意識が到達するのはそういった両者の統一という直感であり、それによって自身の真実態を「この」個別的な自分だけで存在する実在として把握する。しかし、その目的は現実化すると同時に消失してしまうのである。

〔二　必然性〕

17／快楽の成就と必然性

自己意識は、快楽の享受によって、自己を対象的なものとする、個別態達成の肯定的意義と、自身に対する否定性との矛盾に直面することになる。この否定的実在は、個体性の即自的な概念であり、その本質は抽象的な範疇である。ここでその対象性は必然性と呼ばれる。この必然性は、統一、区別、関係といった諸範疇間の絶対的な関係と、抽象的な運動から構成される。

自己意識は、快楽の享受によって、生命の中へ躍り込んだと思ったところが、空虚でよそよそしい必然性としての死せる現実であるところの自己を得ただけなのである。

〔三　没　落〕

18／個体の経験の二重の意味～生への没入と死の獲得

19／必然性の威力－個体性の破壊

この個体性の経験は、自分の目的という契機から、自分の本質という契機への移行として捉えられるが、この意識にとって、自身の本質は即自的な経験としての意味をなさない。その時、この抽象的な必然性は、普遍性の否定的で不可解な威力を示し、個体性はその前で砕け散ってしまう。

20／自己意識の自己喪失

b　心胸の法則と自負の錯乱

21／自己意識の新しい形態～心胸の法則（必然性の意義を認めた個別性）

22／目的としての心胸

〔一　心胸の法則と現実の法則〕

23／心胸と現実との対抗関係

この新しい形態は、先行の個体性と真実態との分裂とは無関係に、自身の本質を否定的なものとして考えている。

24／この個体性の目的

この個体性は、心胸の法則に矛盾している現実の必然性を撤廃することへと向かっていく。そこでは無媒介の本質がそのまま現実化しようとされ、それは人類の福祉を生み出すことに求められている。

25／現実の法則に従属している人類と心胸の法則

現実の法則は心胸の法則から分離されている分だけ自由である。しかし、人類はその秩序から分離され、受難のなかに生きている。この法則と人類の鬩ぎ合いのなかから、やがて心胸は己の法則を合法則的なものとして、それ自身に自己同一的な意識を抱くようになる。

〔二　心胸の法則の現実化〕

26／心胸の法則の自己完遂・現実化～存在への参入

個体の心胸の法則は、現実化の場面では既に心胸の法則ではなくなり、存在という形式を取得し、普遍的な秩序となる。即ち、その時この「心胸」の個体性は、それまで撤廃するものとしていた当の現実の法則そのものの威力を獲得してしまい、個体は個体に留まりながらも普遍性として成長していく。そして、現実を自己の本質として

承認するに至る。

27／他人の法則の感知～心胸の法則の普遍性

個体が、自身の行為（その概念）によって、己の個体性を完遂しようとするそのことによって、その行為自身はまさに現実として生起し、それが対抗していた筈の普遍者に所属するようになる。この設問に窺えるのは、個別的な心胸と普遍性との無媒介の統一の思想であるが、これは普遍性としてはその形式だけを具えた特殊なものに過ぎない。言われているのは、特殊的なものが、そのままに普遍的なものとして妥当する筈である、ということである。そこに見出されるのは、自身の心胸の法則の実現ではなく、自分と異なった他人の法則であり、己にとってはそれらさえもが残酷な必然性と同様のものである、ということである。

28／意識の自己疎外

こうして個別性としての存在を追い求める個体は、現実という自体的普遍者の中では没落していく。だから、この意識は（必然的に）存在に達することができず、自分自身の疎外に達してしまう。現実は他の人々の心胸の法則の集合態であり、意識は自身の現実化のプロセスのなかで、現実が生命に基づいた秩序であることを経験する。

〔三　自負の錯乱〕

29／自己意識の形態の二重性・相対立する本質態への所属

絶対的な普遍性の形式の装備（心胸の法則）
｜
自己意識自身の本質であり、結果である秩序

矛盾～錯乱

本質という形式
現実という形式

30／自己意識の没落の自覚～「狂い」

この矛盾のなかで、自己意識が自身の没落を自覚しそれを表現する時、そこでは己の経験の総体が決算されている。そこに示されているのは自己意識の内面的顛倒であり、現実と非現実が矛盾したままに直結しているという、意識の内奥における狂気でである。

31／自負の激昂と心胸の顛倒

こうして、没落した自己意識は自負の激昂へと移りゆくが、それは、自身の顛倒からの逃避であり、そのことを他者へ転嫁することに他ならない。心胸は普遍的法則としての自己を目的とするが、そうである限りどこまでも非現実的である自己の現実態に留まる。

32／秩序の法則

無媒介に普遍的な心胸の法則は顛倒していることが見られてきたが、そうすると、普遍的な秩序も心胸の法則であることに違いはないのであるから、秩序もまた顛倒したものの法則であることに変わりはない。

しかし秩序においては、その法則が精神を持った普遍性であり、実体（内なるもの）となっている。

33／公共の秩序～「世路」
万人の万人に対する戦い・普遍性の私念

34／秩序の現実性と徳
秩序においては個体性は顛倒せられ、その法則が個体性そのものを撤廃するように働き、意識はそのことを自覚しているが、その時意識の新しい形態が生ずる。それが個体性を犠牲に供するところの徳である。

c　徳と世路

〔一　行為的理性における徳の段階〕

35／徳の意識と世路の運動
前項までの行為的な理性のプロセスでは、先ず最初の形態としては、純粋な個体性としての自己意識と空虚な普遍者との対立があり、第二の形態としては、法則と個体性という両契機を具えながらも、一方の心胸は両契機の無媒介の統一であり、他方の法則は両契機の対立であった。
徳と世路の関係においては、その対立と統一との相互間の運動こそがその形態となるが、それらの運動の方向は相反するものとして立ち現れてくる。徳の意識にとっても、世路にとっても、個体性そのものは既に廃棄されるべきものとなっているが、徳の意識における個体性は、やがて普遍者のもとへ、真であり善であるものの訓練としてもたらされるべきであり、逆に、世路は絶対的な秩序を内的な本質として持ち、存在する現実としてはさしたる変化を受けない。

36／世路の運動における二つの側面
世路の内容は、既に先立つ自己意識の運動に現れている。それは一方では、己の快楽と享受とを求める個別的な個体性のことであり、それは己の個体性の希求によって没落する。没落することによってそれは普遍者となるが、その普遍者は個別態に対立する限りの普遍者であり、普遍者の空虚な形態であるところの必然性であるに過ぎない。他方では、世路は自身で法則たろうと意志し、自負の内に陥り、現行の秩序を攪乱する個体性となる。普遍的な法則は、この自負の対抗によって己を維持するが、現実についての意識面においては、狂乱としてであり、対象的な現実としては、おしなべて顛倒したものとなる。

〔二　徳の騎士と世路との戦い〕

37／徳の目的と世路の本質
狂乱のさなかにある世路の普遍的なるものは、自分の真実の現実性を、その顛倒の撤廃を介して、徳から受納すべきであるということになる。即ち徳の目的は、さかしまに陥っている世路を更に顛倒せしめる、二重の顛倒によって、世路の本質を顕現させることにある。ここに徳の、世路の現実性を征服する戦いが開始される訳だが、その武器は互いの本質でしか有り得ない。

の武器は互いの本質でしか有り得ない。

38／信における抽象的な普遍態・善

徳の意識は、己にあって即自的に成り立つ信を目的としているが、それは現実的な普遍態ではなく、未だ抽象的な普遍態である。又、徳の意識が世路に対抗しようとする時、初めて善を実現しようと意志するが、この時善はまだ現実態ではなく、即自的であるとの限定を受けている。その限定は善は他者に対してのみあることを、故に即かつ対自的な実在ではないことを示している。

39／普遍的なるものの属性・素材

ここでいうところ善なるもの、或は普遍的なるものは、天賦、能力、力等と呼ばれるものであり、これが生命を持ち運動するためには、個体性の原理が必要とされる。だから、善は徳にとっても世路にとっても、それぞれの形成を可能にする受動的なものであり、自立性を欠いたひとつの素材であるに過ぎない。

40／徳と世路の戦い

前項で示された普遍的なるものが、この戦いにおいては、徳と世路の双方に共通な武器とされる。しかし、徳は自分の目的と世路の本質との根源的な統一については信を抱き、その信を目的の即自的完遂の切り札にしようと考えている。となると、徳の騎士の戦闘という行為は、一種の欺瞞であり、見せかけの戦い、八百長である。善なるものは、騎士の手を介するまでもなく自分で自分を完遂することができるし、騎士が善なるものの保全と現実化のために戦っているのであるとするならば、その戦いによって破壊の手を及ぼそうとしているのは、当の善なるものである筈がなく、実は天賦や能力と呼ばれるものであるに過ぎない。

逆に、世路がこの戦いにおいて、徳の意識に差し出すものは、悉く個体性によって生命づけられた普遍的なものであり、現実に善なるものである。だから、徳が世路のどこをとらえようと、徳が触れるところには全て善が顕在化しているのであり、世路は不死身なのである。

41／徳の束縛と世路の自由

世路の本質は個体性にあり、徳が束縛されている契機のいづれからも自由である。このことからも、世路の勝利は確実なものとなる。

42／善き即自の待ち伏せという希望の儚さ

〔三　徳の敗北〕

43／現実性と個体性

今まで見てきたように、徳と世路の戦いでは徳が敗北するが、これは徳の本質が抽象的な非現実的なものであることに基づいている。徳は個体性を犠牲に供することで善なるものを現実性に齎し、自身の存立をはかろうとするが、現実性の側面は即ち個体性の側面であり、善なるものは即自的な存在そのものである。しかし、徳の意識は即自的なものと存在との真実性を持たない区別に基づいており、徳の意識はここに、

現実性の原理を個体性として体現する世路に敗れ去るのである。
世路は不変なるものを顛倒し、抽象の無から実在性という存在へと転換するのである。

44／世路の凱歌・心胸の空語
世路の勝利の凱歌は、世路に刃向かった徳に対して、本源的に（古の）徳がもっていた民の実体における内容豊かな基盤を欠いていることをいう。

45／意識における世路の経験
現実性を持たない即自的に善なるものの「表象」を纏うのみであった意識が、自分の行った戦いによって、世路が見た目に映る程悪いものではないことを経験した。

46／世路の勝利による世路の消失
徳＝即自的な見方
世路＝対自的な見方
現実＝不可分なものと普遍的なものの統一

47／個体性の過程